

## 高齢社会・人口減少時代の到来と高齢者防災

長崎大学大学院生産科学研究科

システム科学専攻 教授 後 藤 恵之輔

「4日午後9時20分ごろ、F市東区の無職Aさん(68)方から出火、台所と寝室などを焼いた。寝室からAさんが遺体で見つかった。F東署の調べでは、Aさんは一人暮らしだった」。これは2001年明けてのある地方紙の記事である。

21世紀には、このような記事が多く新聞に載るのではなかろうか。記事中の68歳、一人暮らしは、高齢者と身寄りの無さを表す。

考えを巡らせば、高齢者は高齢社会に、身寄りの無さは人口減少にと繋がっていく。

21世紀の我が国では、高齢社会(超高齢社会)及び人口減少時代が到来するのである。

21世紀中には、現在、日本人の7人に1人の高齢者が、4人に1人、さらに3人に1人の高齢社会、超高齢社会を迎える。他方、人口は現在の1億3千万人から5500万人にまで減少すると言われている。このことと災害発生による高齢者の被災とを、勿論切り離して考えてはならない。この関係を、災害発生前から発生後まで時系列的に追って、高齢者の防災について考えることとする。

まず災害発生前である。災害が発生すれば、高齢者は最も逃げ遅れやすい。ここで思い出すのは、1985年7月に発生した長野市・地附山での地すべり災害である。この災害

では老人ホームのお年寄り26名が逃げ遅れて亡くなった。地すべりが事前に予知されていたれば、この26名は助かっていたに違いない。

すなわち、自然災害であれば『災害の発生予知』が重要である。発生予知には、発生時間、発生場所、発生規模の3要素があり、発生場所の予知が第一義的に重要とされる。災害の発生場所が予め分かっていたら、発生防止策や避難対策などが立てられるからである。災害を事前に予知することにより、多くの高齢者を救うことができる。

次に災害が発生した時である。ここでは『災害発生の通報』と『災害情報の伝達』が大切である。著者らが長崎市の斜面住宅地に住む高齢者121世帯を対象に実施したアンケート調査によれば、「地域内の防災対策として必要なものは何か」の問に対して、「災害発生時の通報システム」を第1位に挙げた所は53世帯(44%)であった。同様に、「行政に防災対策として要求したいことは何か」の問に対しては、43世帯(36%)が「災害発生時、速やかに被害状況を知らせて欲しい」を第1位に挙げていた。

『避難』も重要である。火事であれば、お年寄りは消すことを考えず、逃げるこ

先決である。著者らが昨年11月に福岡市防災センターで行った高齢者擬似体験による消火実験によれば、高齢者では消火器が重くて持てなかったり、持つことはできても消火液を的確に火元に当てるのが困難であったりした。逃げた上での命あつてのものだね、を痛感した。高齢者が寝たきりの場合や足腰が弱く一人では動けない場合には、避難誘導してくれる人が必要である。

人口減少の時代を迎えるとき、避難誘導してくれる人がいるか、深刻である。

災害の発生後には避難生活が待っている。仮設住宅での高齢者の避難生活を、コープこうべ・生協研究機構が阪神大震災後に行ったアンケート調査から見てみよう。神戸市郊外及び周辺都市の仮設住宅入居者を対象とした結果の一部であるが、年齢層別に見た回答者の震災前後における体調変化は、50歳を境に、それ以下では「変化なし」が過半数(52.9%)であるのに対して、50歳以上では「悪くなった」が過半数を占めて多く、しかも高年齢になるほどその割合は多くなる。65~74歳で58.7%、75歳以上では64.4%が悪化を訴えている。避難生活ではこのように、体調変化を始めとする『健康問題』など、高齢者にとって種々の問題が発生する。

さらに災害発生後の避難生活は続く。同じコープこうべ・生協研究機構の調査によれば、仮設住宅団地での近隣関係の評価のうち、プライバシーの確保で「悪くなった」49.2%と、半数の人がプライバシーの保ちにくい状況を訴えている。このプライバシーの保ちにくさが精神面へ悪影響を及ぼし、『心のケア』が必要になってくる原因の一つとなる。

又、前記の体調変化に伴う自覚症状について調べた結果、全体的に見て約4割を超える者に生じた変化は、①足腰の弱化(41.5%)、②不眠症(40.4%)、③首・肩凝りの変化(40.3%)である。さらに約3割の人に生じた変化は、イライラしがち、無気力、関節痛である。この結果で、不眠症やイライラしがち、無気力という精神的な自覚症状が多いことは要注意である。

首・肩凝りの変化も精神面からきているかも知れない。心のケアが必要な所以である。

以上述べてきたように、災害の発生予知、災害発生時の通報システムの充実、被害状況の速やかな連絡、安全にできる避難、健康を始め安心して過ごせる避難生活、心のケアなどが、高齢社会・人口減少時代に、最大多数の災害弱者となり得る高齢者を災害から守る手立てのいくつかである。

21世紀はIT革命、ロボット化の時代でもある。ITとロボットを活用することにより、高齢社会・人口減少時代の到来にかなり対処できるのではなかろうか。災害発生時の緊急通報と災害情報の伝達は、被害者側である高齢者と行政との関係であり、双方向から簡単に連絡できるシステムがあるとよい。それには、例えば高齢者でも発信・受信ともに簡単に使いやすく工夫された携帯電話等の活用が考えられる。災害後の避難生活の支援においても、高齢者の健康管理を支援者・行政等が24時間態勢で遠隔地からでも行うことができるなど、ITは役立てられるに違いない。

高齢者が安全に避難できるためには、例

えば人手がなかったり、避難途中で障害があつて避難を人間が誘導できない場合になど、ロボットの活躍が期待される。さらに、ロボットは危険箇所に入っていけるため、消火や救助活動でも活躍を期待することができる。

しかし、ロボットに心まで委ねることはできないであろう。そのようなことができ

る時代が21世紀中に到来するとは思えない。例え自律型ロボットが完成して、心を持ったロボットが登場してもである。

したがって、心のケアには人が欠かせない。

心のケアだけでなく、高齢社会(超高齢社会)・人口減少の時代になっても、基本には『人の存在』があることを忘れてはならないのである。